

# 誰もが当事者に

認知症

## 姿消す高齢者

①

した。3人の娘に恵まれた。大手電機メーカーの

関連会社で長年勤めた

「仕事一筋の企業戦士」だった紀行さんに異変が現れたのは6年ほど前。妹と娘の名前を混同し、5

00円の買い物に100円札を何枚も出した。

だが、思うように言葉

が出なくなつても、夫婦

がかかる生活は崩れな

かった。紀行さんの優し

さは変わらなかつたか

ら。庭でもいだミカンや

モミジの葉を丁寧に食卓

に並べる紀行さん。「き

れいやねえ」。澄江さん

のまぶたには、褒め言葉

にっこり笑う紀行さん

の姿が焼きついている。

「早く連れて帰つてあ

げたい。自分だけがご飯

を食べてお風呂に入つて

良いのか」。澄江さん

目から涙があふれる。学

生の頃から2人を知る介

護施設職員の重留正弘さ

ん(72)は「家族が認知症

を受け止められず、きく

しゃくる家が多い。認

取材した。

IIつづく

## 全国に患者300万人超



午前3時半、食卓に濃紺と黄色の夫婦茶碗が並ぶ。「ご食べようね」。北九州市小倉南区葛原の田中澄江さん(69)が自宅の食卓で声をかけた。だが、夫紀行さん(73)はいない。行方が分からなくなつた認知症の紀行さんの帰りを待つ日々は今年5月2日で丸2年になる。

その日、紀行さんは雇過ぎに普段通り散歩に出

北九州市内を流れる紫川を上流から河口まで歩いたこともある。

情報が寄せられた10カ所には、警察犬も出動した。だが、においが残っていたのは自宅から約500㍍離れた公園の近くまで。所持金はないはずだが、車に乗った可能性も考え、警察を通してタクシー会社にも照会した。手は尽くしたが、いまだに行方は分からない。

「早く連れて帰つてあげたい。自分だけがご飯を食べてお風呂に入つて良いのか」。澄江さんの姿が焼きついている。

「早く連れて帰つてあげたい。自分だけがご飯を食べてお風呂に入つて良いのか」。澄江さんの目から涙があふれる。学生の頃から2人を知る介護施設職員の重留正弘さん(72)は「家族が認知症を受け止められず、きくしゃくる家が多い。認

新聞にラインを引くことが日課だった田中紀行さん(家族提供)。身長160㌢で細身。行方不明時は灰色ジャージー上下姿で、紺色キャップをかぶり、赤いランニングシューズをはいていた。情報提供は福岡県警小倉南署(093・023・0110)へ。

69年、紀行さんと結婚  
高度経済成長期の19

知症になつた後も2人は  
(次回から社会面掲載)

# 搜索は時間との戦い

認知症

## 姿消す高齢者

②

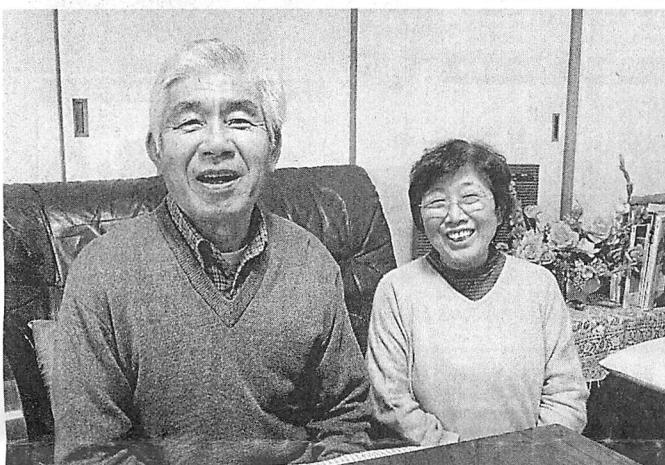
「奥さまと仲がいいで  
すね」。自宅を訪ねた記  
者の方に、北九州市若  
松区の岩永國秀さん(77)  
は「そうかなあ」と言つ  
て穏やかに笑った。くし  
できれいにどのえられ  
た白髪に、茶色のセータ  
ー。街ですれちがつても、  
岩永さんが認知症とはわ  
からないだろう。

岩永さんは11年12月の  
ある日の午後、妻悦子さ  
ん(70)が近所に届いた商  
品を取りに出たわずか数  
分の間に自宅を出て行方

不明になった。約4時間  
後に保護されたが、周囲  
が驚いたのは見つかっ  
た所だ。自宅から洞海湾  
を挟んで直線距離で10キ  
ロ以上離れたJR戸畠駅。  
悦子さんが想像もしなか  
った所だ。

後に保護されたが、周囲  
が驚いたのは見つかっ  
た所だ。

## 予期せぬ長距離移動



「事故に遭わなくて良かった」。笑顔で振り返る  
岩永悦子さん(右)と國秀さん=北九州市若松区  
で12年3月、錢場裕司撮影

つた。自宅を出た後の足  
取りは今も分からぬ。  
悦子さんは当時を振り返  
って言う。「私の姿が見

えない」と不安になり、搜  
査のために出て行ったよう  
です。心臓が止まりそう  
だった。事故に遭わなく  
つた。

岩永さんのように、想  
像以上に遠くに行ってしま  
う認知症のお年寄りは  
多い。何らかのトラブル  
になれば警察に保護され  
なければ、身なりが普通で歩  
いていれば、周囲は異常  
事態に気付かない。

乗物を使う人もい  
る。福岡県大牟田市の元  
主任介護支援専門員、岡  
山隆二さん(42)による

て本当に良かった」

大手電機メーカーの技

術者だった岩永さん。外

に出かけるのが好きで、

定年後も「地域の役に立

ちたい」と民生委員を務

めた。若い頃はスキーや

山登りをした。今まで

も足腰はしっかりしてい

る。行方不明になった一

件以降、悦子さんは夫を

1人にしていないようにして

いる。穏やかな暮らしを

取り戻した。

岩永さんのように、想

像以上に遠くに行ってしま

う認知症のお年寄りは

多い。何らかのトラブル

になれば警察に保護され

るが、身なりが普通で歩

いていれば、周囲は異常

事態に気付かない。

乗物を使う人もい

る。電車に乗った可能性は

あるが、岩永さんはその

時、お金は持っていない

じ、自転車で大牟田市か  
ら約30キロ離れた福岡県久  
留米市に行った男性や、  
電車と新幹線を乗り継い  
で京都で保護された女性  
もいるという。車を運転  
して高速道路を約17キロ逆  
走した女性もいた。3人  
とも無事保護されたが、  
大きな事故になる可能性  
もあった。

お年寄りは衰弱も早  
い。不明者の捜索は時間  
との戦いだ。岡山さんは  
介護事業所や家族には、  
いなくなつたことに気付  
いて30分たてば、必ず捜  
索願を出すようお願いし  
ていた。24時間たてば、  
生命の危険性が高まる」  
と話す。一刻も早く関係  
機関に通報し、SOSを  
発信すること。それは行  
方不明の問題にかかわつ  
た経験者の共通の教訓

IIつづく

# 事故防止へミニスも公表

認知症  
姿消す高齢者

③

「先日、私の施設から行方不明者が出てしまいました。昨年3月、市民団体や介護・医療関係者などでつくる実行委が北九州市で開いた認知症を考える集会」発表者として壇上に上がったディーサービス「さくら館」(同市八幡西区三ツ頭)の事業所長、島崎元宏さん(37)の声がホールに響いた。

島崎さんは、400人を超す参加者を前に自分自身のミスを明かした。警察に問われて男性の上着の色をベージュ、ズボンはグレーと説明したが、約5時間半後に12時5分ごろ男性がない行方不明になつたのは小雨が降る寒い日。午前11時5分ごろ男性がない

ツフが最後に見かけてから1時間近くたつていった。島崎さんは「血の気が引いて愕然とした」という。

ここに気付いたが、スタッフが最後に見かけてから1時間近くたつていった。島崎さんは「血の気が引いて愕然とした」という。

島崎さんのように、介護などの事業者が自らミスを公表するのは珍しい。複数の介護関係者は「施設の評判が悪くなるのは避けたい。死亡しただけがしたりしなければ、隠したいと考える事業所は多い」と口をそろえる。業界の常識と異なる発言について島崎さんは「真剣に聞いてもらうには伝えなきゃいけないと思った」と話す。

つてあいまいな記憶で言つてしまつた。重要なのは確実な情報で、自信がない時は『覚えていない』と言うべきです」と強調した。

## 検索ネットワーク構築

島崎さんは、400人を超す参加者を前に自分自身のミスを明かした。警察に問われて男性の上着の色をベージュ、ズボンはグレーと説明したが、約5時間半後に12時5分ごろ男性がない行方不明になつたのは小雨が降る寒い日。午前11時5分ごろ男性がない

島崎さんは、400人を超す参加者を前に自分自身のミスを明かした。警察に問われて男性の上着の色をベージュ、ズボンはグレーと説明したが、約5時間半後に12時5分ごろ男性がない行方不明になつたのは小雨が降る寒い日。午前11時5分ごろ男性がない

した背景には、日々の取り組みもある。さくら館は北九州市の八幡西、若松区と中間市にある25事業所とともに独自の「検索ネットワーク」を構築。参加施設で行方不明者が出れば、協力して検索スを公表するには珍しい。複数の介護関係者は「施設の評判が悪くなるのは避けたい。死亡しただけがしたりしなければ、隠したいと考える事業所は多い」と口をそろえる。業界の常識と異なる発言について島崎さんは「真剣に聞いてもらうには伝えなきゃいけないと思った」と話す。

家族の了解を得て、利用者の名前▽年齢▽要介護度▽身長――などをまとめて、写真を添付した名簿をあらかじめ作成。支えが大きい。藤原さんはチームで連携できるが、検索ネットは第三者が入って冷静になることができる。メンタル面の実際に行方不明者が出れば、各施設にメール配信し、プリントしたチラシ

ミニスや体験を隠さず語った「さくら館」の島崎元宏さん  
＝北九州市戸畠区で12年3月、錢場裕司撮影



島崎さんは、400人を超す参加者を前に自分自身のミスを明かした。警察に問われて男性の上着の色をベージュ、ズボンはグレーと説明したが、約5時間半後に12時5分ごろ男性がない行方不明になつたのは小雨が降る寒い日。午前11時5分ごろ男性がない

島崎さんは、400人を超す参加者を前に自分自身のミスを明かした。警察に問われて男性の上着の色をベージュ、ズボンはグレーと説明したが、約5時間半後に12時5分ごろ男性がない行方不明になつたのは小雨が降る寒い日。午前11時5分ごろ男性がない

# 24時間態勢 草の根挑戦

認知症

姿消す高齢者

4

2月22日朝、北九州市

小倉南区の自宅から認知症の女性(71)が行方不明になった。「こげ茶のダウン、黒のショルダーバッグをかけています。お心当たりの方はご連絡をお願いいたします」。名前と年齢、住所とともに、女性の情報提供を呼びかけるメールが一斉配信された。

メールを送ったのは、守恒校区まちづくり協議会(小倉南区)が昨年9月に設立した「守恒SOS

Sネットワーク会議」だ。05年度から地元に行事や防犯情報などを流していく配信システム「もりつネット」を活用。900人を超える地元の登録者が行方不明の情報を送る。

ネットワーク会議会長の笠月二男さん(75)が専用携帯を持ち、捜索依頼を24時間受け付けている。

女性は行方不明になつた約3時間後、3キロ以上離れた同市小倉北区の住宅街で無事見つかった。

本人のかばんに家族が入



住宅街を歩き行方不明になった認知症の人を捜す模擬訓練を行った参加者=北九州市小倉南区で、錢場裕司撮影

ことができたという。

女性は過去にも「娘家に帰る」などと、自宅を飛び出し、10キロ以上離れた工業団地で保護されたことがある。GPSは捜索活動の大きな助けになるが、行方不明時に本人が携帯電話を持っていない場合もある。家族だけで捜すことの難しさを知る女性の夫はネットワーク会議の設立に「これは助かると思った」という。

初めて配信を依頼したのは昨年11月。女性は発症から10年ほどになるが、世間話ができるユーモアも通じるという。このため女性の夫は「本人の耳に入つてプライドがに加わった男性が道案内機能で夫(69)が居場所を機能があるスマートフォン(多機能携帯電話)のナビゲーションシステムを使い、本人を見つける

女性は過去にも「娘家に帰る」などと、自宅を飛び出し、10キロ以上離れた工業団地で保護された。「協力してもらつたおかげで無事だった」と夫は言う。

ネットワーク会議は認知症高齢者の行方不明問題について勉強会を重ね、今月2日には捜索模擬訓練を初めて実施。地元住民ら約110人が実際に街を歩いて行方不明者役を捜した。参加者の中には「自分はすぐに捜してもうう側の人間になるから」と切実に語るお年寄りも多く、反省会では熱のこもった議論が続いた。地域の温かい目

S(全地球測位システム)が、メールを受けて捜索されていた携帯電話のGPS機能で夫(69)が居場所を探索。入り組んだ住宅街で本人がいる場所になかなかどり着けなかった

ところが伝わるが、夫は「見つけないと死んでしまうかもしない。協力していただいた方が良い」といったことを周囲に明かしていなかった。配信で認知症のお年寄りを守る挑戦が草の根で動き出している。 ॥つづく

# 「SOSネット」活性化

### 認知症

姿消す高齢者

5

(82)が行方不明になつた。連絡を受けた自治体や警察が地域の関係機関にファックスで連絡し、鉄道やバス、タクシー、銀行や郵便局、介護施設や行や郵便局、介護施設やスーパーで働く人たちが、新井さんの情報をまとめたチラシを掲示したり、新井さん保護に気を配る。新井さんは郵便局の職員に無事保護される。

劇中のシステムは実在する。認知症の女性（当時79歳）が行方不明になり遺体で見つかる事故があり、北海道の釧路地域で、保健所や警察、郵便局、認知症の人の家族の会などが94年に行方不明者を捜す「SOSネット

認知症の新井佐助さん  
（82）が行方不明になつた。連絡を受けた自治体や警察が地域の関係機関にファックスで連絡し、鉄道やバス、タクシー、銀行や郵便局、介護施設や行や郵便局、介護施設やスーパーで働く人たちが、新井さんの情報をまとめたチラシを掲示したり、新井さん保護に気を配る。新井さんは郵便局の職員に無事保護される

1。「新井さん」は関係機関の協力で無事だたが、ナレーターは「まだ夢物語。現実はすべての人たちが劇のように助かるわけではない」と問題提起する。

披露する寸劇のストーリー。

## 安心して外出できる地域へ

合研究所（東京都）の09年全国調査によると、回答した880市町村のうち、組織があるのは3割以下（24.5）。「活動に稼働している」のは57.1%しかなかった。桑野康一副理事長は「担当者の異動や住民へのPR不足で、だんだん使われなくなってきた」と考えられる」と話す。

全市を挙げた搜索模擬訓練をしている福岡県大牟田市も99年にSOSえ



認知症のお年寄りが行方不明になる寸劇で捜索ネットワークの重要性をアピールするグループ  
=北九州市小倉北区で、錢湯喫司撮影

認知症介護研究・研修  
東京センターによると、  
行方不明者が出了場合  
「なぜ外に出られないよ  
うにしなかったのか」と  
家族や施設が批判され  
ことがある。だが、閉じ  
込めるような対応は逆効  
果で、症状の悪化や混亂  
の引き金になるという。  
同センター研究部副部  
長の永田久美子さんは強  
調する。「認知症になっ  
ても、人として外に行き  
たいという思いや理由が  
ある。閉じ込めるのでは  
なく、外に出たがる理由  
を探りながら、安心して  
出かけられる地域をつく  
ることが本人と家族への  
手助けになる」。誰もが  
迎える老後の穏やかな暮  
らしは、地域の人々のつ  
ながりにかかっている。